



繪本報仇安遠源

^ 13
2890
3



縛本報仇安達原冊之三

浪華

箕山

文亭主人著

門人

辭允文而叟校

第四編

死を均くす人違ふ禍と看
身は托せば賊怒を辛抱受

早川兵庫が武者修行を聞て妻小秋さまを停

兵庫までお連れして終り出立し一宅より

吉日と撰ぬるときに家隸忠六と名しもの年四十七歳

これ先代より仕へる忠節のものなり。兵庫に祈りお言

てらひ。この君一人を度見あらん又行程もおぼやうなく存



昭和九年七月九日 購求

るなり。何卒下郎の後従ひ召連らるべしと達てアられど
も兵庫笑うそや。是度武者牧牛子赴くと吾汚名
と雪ん為るれば。僕とも俱し。諸州も出る。みあく兵
庫、諸行も出れば。もま系て柔弱なれば。僕も連行しな
い。あぶ折角おもひまながら。反と嘲けられん。口惜
くがれば。つまでも思止べしと利解し。と告ぐ。聞しければ
忠六も是非なく思と有り。終も兵庫の諸州武者修行
のためと。啟行も及ぶ。嗣竹太郎忠六もろともせめて
国境まで見送らんと一里むあり。従し。兵庫ぞひ反すべ
し。と只言ふ。あれば。忠六竹太郎も止まら。く。て。愛別の

思ひと異々述を涙ながり。別し。あれ。おのよめ見收とい
後まど思ひをくれ。去り。ど。八雲。波傳。蔵。か。権
と撥。ぎ。揃。釵。衣。後。の。た。ら。ひ。奪。す。り。と。立。退。し。より。欲。心
強。なり。と。人。と。だ。ま。し。金。銀。と。一。財。し。も。の。あ。れ。ば。誰。奪。ひ
する。ほど。に。遂。は。悪。心。増。長。し。と。盗。賊。同。躰。も。何。州。か。住
居。と。定。め。ず。し。て。諸。々。を。徘徊。ら。る。も。之。由。武。州。田。原。人。衆。郡
那。加。貝。山。の。林。鹿。も。導。ら。る。権。現。堂。主。の。在。り。が。見。ゆ。り。の
邑。の。界。源。助。と。も。も。の。宿。願。の。あ。り。て。毎。夜。口。足
ま。つ。り。折。な。せ。し。折。り。向。の。方。より。白。裳。束。の。か。ま。り
る。ゆ。へ。不。由。番。お。も。ひ。し。次。牙。も。近。く。な。ら。て。ま。す。く

武州田原の巻三

慄然立ちて源介おもふ世は函魂とふものなるらん。おそろくくと臆病神のぞく神つらう。頭の髪をそくく
立ちれば今も彼ものためこそ殺せん。その思ふく之
と馳て路の傍に松の木あり。おほく是木の梢に
搔のほり齒も齧くと合せうね身も戦慄とふ言をて
遙く下のうらと見え。君が彼幽霊とおぼしき女除
々と来りると跡より男一人をさして出ぬ。私語を
歩ほども源介が登る。松の樹の下へ来り二人のも
のざり。城門は均と死とえ。選みあつるのやるせなき
とわたり。死同の約束されまど。狗を定くうへに

志くも壯く人の来ぬち殺しぬと女は彼男の
馳て刀を抜ち。後へ回と見え。女は手を合く。あ
くれ。何陀陀仙と云せ。泣ぬ。撲地と首を打落
せば源介の木の梢に寒身君が是形勢を看せ
ひとく倒と標より仆落。二人が中へ落ければ。今
女と斬。男は慄然とし。おどろき持する刀が打捨
て。と逸く。北矢如。源介のそのま。且く矢と交ひ
や。あめ。幻のどく。慄立いや。ま。空おそろく。燕文を
心地る。なると立起。走んとすれども。後々。助くれ。が動
とあ。已。左と。これ。刀。血。流。右。り。女の。首。を。な。れ

あまのつものちの冊三

三



躰たゝらの血ちはそそめ。源げん介けが體たゝらは鮮あざ血ちつゝひ身みも冷ひや々々と
しゝ生いたる心こゝろ地ちいなるりりり斯かくありし折おり々々八や雲ぐも
あつと通とほりかり源げん介けが声こゑをかきり叫さけぶを聞きく何なに
事ことやんとしりれば。女むすめの首くびおちて一人ひとりの男おとこ側そばは泣な呼よ
光あき景さやるり八や雲ぐもの気き強つよも近ちかよりと如何いかなるしと必かなと問たが
ぬれば。源げん助すけの地ぢ獄ごくは仙せんと見みくま何なにと言いふも胸むねと
ころ手てと合あして泣な哭なとせきこみく言いゆるも昔むかしは是この
下したの里さとは住すむ源げん介けとふものなり。此この山やまの彼うらは権けん見けん堂どう
は宿しゆく願ぐんあつと。毎ま夜よ糸いと指さしのおろし。今いま夕ゆふ白しろ衣ぎぬとさ
たる女むすめ會あ合あひが傍おとが病やより幽ゆ靈れいかゝると慌あわてお

そろゝさの餘あまは是この松まつ樹たのほり居いは女むすめとてくるは
又また男おとこ一人ひとりを山やま来きり昔むかしのほり木きの下したに跨か立た二ふた個ごの
かり活なと聞きは均まんと死しとえく送くわひ死しぬる物ものと聽きて
男おとこの女むすめの首くびを斬きると昔むかしは愕おどろとして直ただちまへ撲たた地ちと
仕つかたり。それと殺ころすは彼その男おとこの行ゆく方かたをれか道みちとせしなり
昔むかしも起おきあがり去さんとおもへども傍そば療ぬけは足あしたがず只ただこの
女むすめの側そばにあるしゝのおそろしを。もや昔むかしも杖つゑと杖つゑかきこの
村むらへ送おくりぬと八や雲ぐもはまがら身みを拖ひせ。八や雲ぐもつらつらみ
まは側そばの懐なご裏ら縛さげ提ちありれば。これをあつめ取とり
りりるは彼その奴やつもくま。男おとこめ斯かくまで女むすめと手てを投なげ今いまも

おんれより命おしく男の身事と人におもてかゝこの
 里へ送りぬれどぐい存外の療めと耽つけたる八雲
 が西眼恰七敵みうつる電光のどく矢庭に源存が
 衣扱なき取除々山に登りし形勢ハ寧ろ生途
 川の軀が空谷子ことなるず源存ハト死しく送途よ
 あるまうち夢路と歩る闇の夜の空吹風の身よ
 志もより更ゆく鐘ハ何州ぞと是世たふさぶの思
 しく更る更みかめりりり斯く夜明よりく
 里の臺の告子おどろき皆くお集水嘘けりるど
 するみ源存やりく服何用れば吾邑の夫人慍で

さいぞけるにゆい人ぶちと覚くうども来言のハカ
 がられバ里人技昇るその宿へ送りりり。斯ありそ
 りるが源存のよのがぐる所聞昂時は知懸所へ詔へ
 ければ直に列位さく事弘明の上は源存が言
 のそり相違あふされバ女の死骸ハ其任邑の草が
 家へおくり廿等しめ源存ハ養食保がさしめられ
 不日は療のやまの平愈におよぶ題休正
 雲ハ源存の衣服とて思ふよ世ハいろく
 あやしくともあるものよと冷笑を終よ奥州
 赴き金岳山に到ける是山一里のおり一里と下の

高山の巻 幸の區家とおもひ是谷間も身とかく
 一奪し金銀積おきて榮花の實をばむすびる
 悪欲も日よまゝく過客の金を掠取あるは
 殺し衣服と剥大悪強気の業をなす。茲も住名之
 定めしは是より舟木山といふ連山は強盜數
 多し一旅行のもの艱むよく穿て八雲の彼奴
 おび欺きくれんと一時氏日黄いろ面容を粧ひ彼
 舟木山に至りしる爰に相州の悪徒もの蟹の流平
 権野剛存とくろし悪支集りて一関へ往來の旅
 客をさぐるがけしに是夕べ三十どりのとも又ハセ七

八とも見し年記かゝるは日落すこゝ過ざらなれば
 もの樹木も見くゞ只色くろき女一人是もつゞけ
 子行つたれ舟木山の中不どは仕も煩ける光景は
 流平剛存の支黨盜賊許多引率さくろし此女の
 なまを臥とこく流平よりさし是所の往還り行つる
 れし如何もつゞけ女はさも苦げまかのやを以て罰
 おもへらく借の持病もても及後つらん薬もてもあり
 ちつた女の懐へ手を入さぐみれども何れも罰
 けの甲斐なしと思ひながさく介抱すすていなれば
 女はさもこれづげは喜がすは何卒貴名の眉はか



けをそ彼まで連りぬる。日ちくれれば心ほそく
 と只顧み頼りぬれば素より流平の好色かするものなれば。
 幕下のものへ送目して。いりよ深い先く行べくと云
 ず流平の女を膺み負う麓へ連行べくといふ。おも
 へらく折よふふみそすか。道まで口説おとさんと色は
 送ふ欲心より何あろなく負行へば此女懐中より珠な
 す双と抜手もをせ流平が咽み碓と突截れは噴
 と叫び仆るとと跳り菟りゑぐりつけ。難なく殺て
 懐中探しこれに金両百數むかり。あれも旅人を掠
 け又もや八雲が殺し取借後の窠子身と潜め

動静を窺ひ居りし。斯といふは推野剛介
 下の次無賊めつれえ立ちりる道まで流平が殺され
 あるが看と大に仰然し何もの所為ぞと云ふ
 仰天しそころ一思ひもあらず彼方の木蔭より女の姿
 の髪友よりとどろ。さなごう鬼女のどくろを大音響あり
 吾こそい金岳山の次無賊八雲とよ女あり今汝が
 首を一刀に刺殺し金かすむひしを忙く已未我が
 堂下みやれがよ。さろくば一々首を並ると叫び
 おもろかり。形勢かなり推野剛介眼をいふ
 憎み女の動勢よる。いほどの喜もあるべし

おとよせよと嘘りれば。八雲の氷の双よと左よあどり
右よ斬後撫元盡み突りれば。数多の盜賊おるて
或いたされ又い殺され女の攀動と看ざりし時
も是形勢お見えて了得し誤りなれば呼言し降参
せんと言られば。旗下のもの一同は坐を脱し俯り
八雲鞭然とお笑ひ欺あがめと言つ懐中より
奪し金百両とぞ。悉く傾ち与へ遂は徒黨の
契約なす。皆々金岳山の隠家へ引率する
〜飯りりり

第五編

兵庫族を赴て賊手よと死

八雲家あり。鷲鳥よ捉
去程早川兵庫諸州志し。武者修行とな
さん。舊国を啓行して彼。是たと行ほど。已
又国州金岳山よさ。かりける頃。應徳三年の空
るじ。登一里の山を越して下りに。趣きし頃。尅ハ日
既。山端は近し。晚鴉西は飛行人。更は無し。もの
不。げぬる時。か。並木の松のかけ。い。や。る。如。族の
女。笠笠。傾け行な。たる光景。なり。兵庫見の
み。し。行。適。り。時。は。是。女。後。より。苦。げ。か。る。契。り。よ。し。呼
そ。ぐ。め。り。る。ゆ。へ。兵。庫。何。が。ら。な。く。立。か。り。如。何。を。

兵庫の巻



山崎闇斎

二〇四



山崎闇斎

二〇五

事也坐るるれば。す答へるる事は。上方の者なるが
是仙臺よ来れども折角仙臺よ。赴かぬが。詩人の夫よ
あふおろし。身や寄（ま）方もなく。女ボ（ろ）のあま
持疾の積の及（あ）りて。歩（あ）が。武士と見えなく
まつる。か。慮（り）外。か。は。し。権の外助（あ）を。さ
辱（う）な。と。さ。め。く。泪（な）を。な。か。い。告（あ）ぐる。是（こ）を。是（こ）を。山
は。雲（う）ん。八雲（や）と。よ。強（く）賊（ぞく）といふ。夢（ゆめ）も。ち。早（は）川（が）兵（へい）庫（こ）
ハ。素（もと）より。仁（に）心（しん）の。もの。な。れ。ば。こ。れ。を。減（ひ）が。と。さ。る。へ。言
よ。い。と。お。し。毛（も）を。れ。ば。幸（さい）より。し。女（おんな）の。さ。を。か。い。な。便（べん）なく
あ。ん。と。懐（ふと）より。薬（くすり）出（い）せ。あ。な。な。と。と。谷（たに）水（みづ）を。汲（く）

飲（の）む。早（は）川（が）兵（へい）庫（こ）。飲（の）む。早（は）晩（ばん）鐘（かね）の。遠（とほ）く。月（つき）風（かぜ）吹（ふ）お。く。て。中（な）木（き）
い。と。も。淋（さび）く。し。の。か。り。れ。ば。兵（へい）庫（こ）女（おんな）は。お。ろ。し。よ。早（は）川（が）
山（やま）の。金（きん）岳（がく）山（さん）と。よ。盗（とう）賊（ぞく）な。ど。の。変（あや）に。し。る。所（ところ）な。れ。ば。早
く。林（ふ）鹿（か）ま。て。出（い）づ。稜（りやう）力（りき）を。添（そ）へ。行（い）づ。と。よ。女（おんな）を。懐（ふと）
と。さ。る。く。有（あ）り。貴（たか）き。意（い）ざ。き。身（み）も。勞（らう）れ。て。歩（あ）が
た。手（て）な。れ。ば。逆（さか）の。し。も。命（いのち）も。ま。る。も。ゆ。べ。と。さ。わ。さ。を。く
と。え。る。れ。ば。兵（へい）庫（こ）ハ。易（やさ）し。く。交（ま）す。と。よ。八（は）雲（う）を。伴（とも）
夜（よ）道（みち）の。こ。と。な。れ。ば。心（こころ）を。配（くわ）い。腰（こし）を。ず。り。糸（いと）を。曳（ひ）て。技（わざ）
く。だ。り。る。に。木（き）木（き）。無（む）糸（いと）滋（し）て。黄（き）昏（こん）も。思（おも）ひ。ま。る。れ
は。溪（たに）の。深（ふか）き。巖（いわ）の。隈（ぐも）曲（まが）草（くさ）の。さ。げ。ま。る。中（な）ま。り。さ

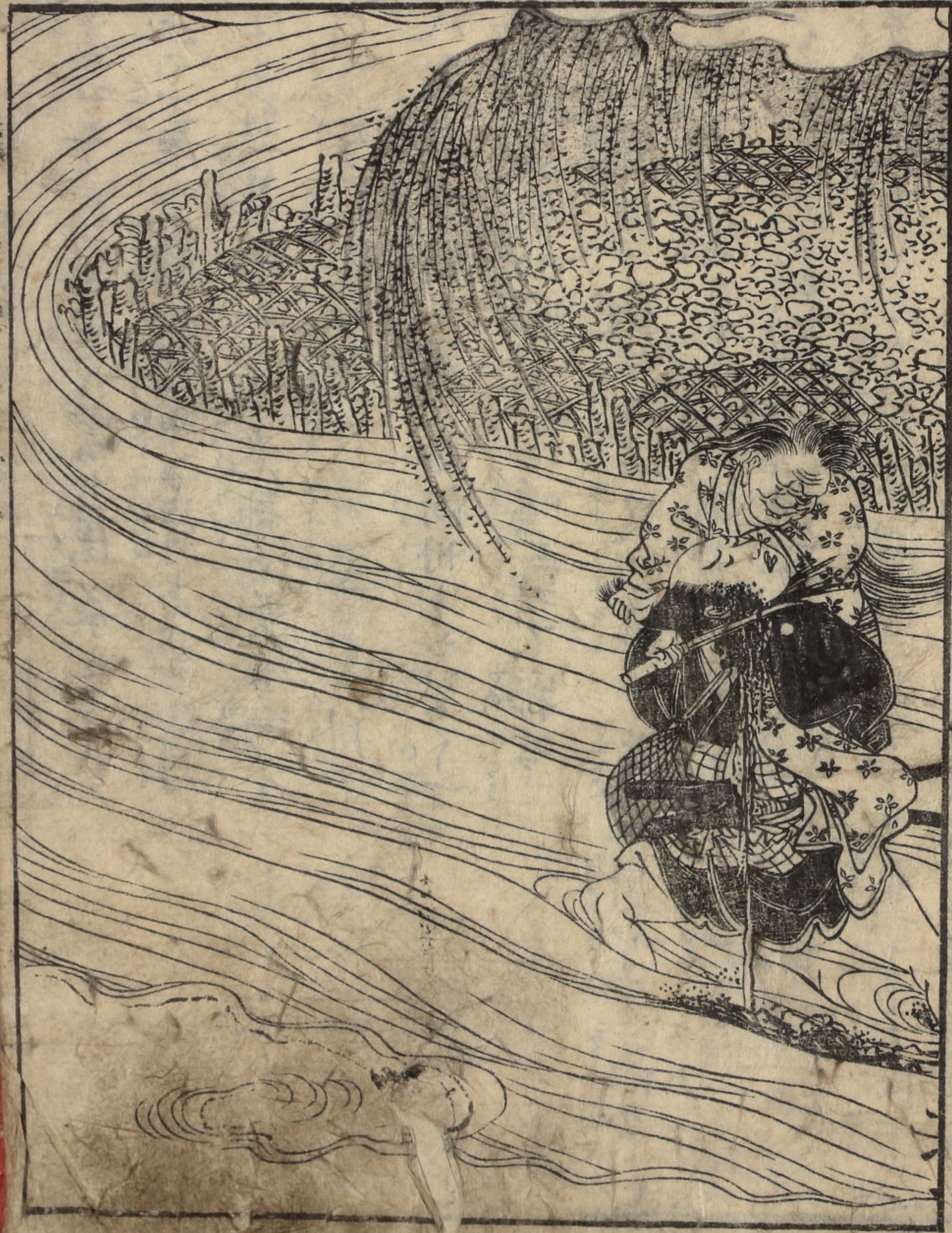
七人盗賊あつたれ出道と遮る路賣の貯あんと
おもふ金も衣服もせり通与と閃されば八雲傷
りて慄こころう兵庫の後よかれ屈られば兵庫
女をかむかかろ。憎す彼奴め一人も適おぐと云さま
刀をすまうせ彼手ももや一人を切倒せ其ひま
左の方より大漢一人踊出斬てくるを右より
かす刀は又大加衣血刀あつて斬立れば許多の
偷児駭乎と蛇種のどくくみ北をたり兵庫ハ
退て討てるとおもても大同然の彼むらとましく
は鮮血滴々刀をぬぐひ女を連て下りし。八雲

八人戦斬とるを看て身は震い。なしく歩ぎま
なまし躰なかりれバ。兵庫はよりて云や心弱も
置なまご。撃も負行んとて脊上まなく除々と下
し。放心せざれば八雲も率と牛ざくかろ。なを
旅方の躰はな。時をこまらや害と伺ふと
はなす。兵庫は昂くと金岳山をどり。終は麓
の是方衣川まぞ着まらり八雲兵庫まむらひ
やういだんくと御介抱よあけりま。荷恩のほど
早れあき信りず。又次血賊の難もめられれば如何
むら。嬉く存するま。せめてこの古又ま今夕の貴客

の旗亭子宿せぬとさめく湯をりぬば兵庫はこれ
こを昇り願ひ我も好まけべしとてさおく柳
かたそへなせして彼女が脊も負なぐ名はおふ
衣川子ぞ来りる頃三月下旬の夜くもりをたてぬ
春のそらの殊なる園の川原まで涉り子と煩ぬ
しは偶あろづきて常子嗜む軍は子夜陰の川の
浅深い礫や揃え知べしといはなるべしと懸て小
石を拾ひ河へ投すも其水声さ考る子深くも
しはねが女と替上り負がけがけ是川波も入て
水もあらしと後へ流る者といえとくわたり

と予て川の中流よりしよ八雲いふく倆伎いぬれば
得たり氷剣ぞすりり後ちて嘖と嘖と一同は兵
庫が喉へ突たられぬ流石の手疎をり雄もあへるく一
は最期と遂より可憐とも不便ともいへなき光
景なり八雲い既も夏志すおしと喜の舌と
兵庫が巖と河濱も甲あが懐中もぬば百両あやりの
金子あぬばかどけぬと奪取その後幕下の財を
呼出く兵庫が衣帯大小糸心く取收得とかなる衣川の
深へ突流りる斯て八雲い兵庫が路費衣服も利
己が陰宿る退くへい無敵とも大獲とも況く

あはれなる世に



生母なり。さり女是八雲か隠家とせし金岳山の溪間よ赤
 土の小屋を營壁常子骨あふれ月灯ひみ代て古松軒
 みるむい苔ふふして老龍の雲は升るがごとく。嘗て人跡
 の殆たる住家有り一日黄昏どき月さき来たるを待て
 八雲芽を拵て君し何州ともなく一棟の風高指さると
 吹送るり山間ごとく鳴動て物冷ありさま。八雲あまそ
 且一牖さし内子又爪止し素の月空は高々とし
 て雨され雲ささるるし。あま毛有のしと下戸を明らば。
 ともう雲井の空は小鳥とくも。八雲これと啼きバ次
 牙子大きくうり聴子鴻とも雀とも有べうりしに下近

くあるに随て其雲を凌の和音七のすざましく改ま
 三尺五天み着る望むとく毛髪栗立さし毒母悪
 強気の姿なれどもお不い内へ弛く家の隅は昏
 と弓め戦慄るしとありらるる空を雲を凌の音淡
 み響てすざましく又く風をさして草木ふるい鳴るるま
 破敗屋の芽の檐を吹まくれは一時は木葉と弁やうり
 撲々として散擾れは幸奮大就鳥翅をかき
 おろし来て既し八雲を揺相雲上をみるに
 石の八雲を鬼と失ひ慄てもうけり空たかく鳴るる
 みかちりて白も就きしづくみろ失せて只月澄て後す

ぶく。八雲の空は気絶せしに輒甦りおもへらく。今我れ
は捉われゆくか。んん一大変とかくも孰るの思ふを推
り夜も昼も雲の中よく漫々の渥もなき海を
行牧の高峯も打越し過るるに偶に付て日影は
身と離るる七首おもひ出し懐悻の憂よと頓て探
ふ。枝とひとく孰るが吐へ突立れば。疼ゆると着て
羽を三つ四つ敲きりれば。八雲の羽を敷ききり。や息
吹の絶り。斯るづくともなく空を飛くうちも
老嫗が突入し疵口より鮮血を流りて。孰る次す
瘦つれぬ。又何州の山も山峯ともたつざりし大山嶽

の死頂は大なる湖のありし。孰るに當るのあまうも是
渚を下て水のじみ。八雲の如何なる命真加のありるを
是ふも捨おきて孰るの羽を鳴し。凌雲もも飛去り
り。八雲の空をえ死し。是湖のいつぞりしも志願
ありしが。身は冷さおぼく偶目を用れば。あつりも孰るも
なく渚の身は半ば。さく。如漸ありて人あちを
ぼへ。借の曩日孰るも捉われしと思ふも今も今も
猶もるもたぐ。吾手ぶく。子大とめ。が孰るに
さく。水と懸。か。ん。其時。これと捨あき。く。これ
は。是渚の水口もさく。かく。人。さ。る。を。お。ぼ。す。と。

あだちの巻三

十六



限りなくよろこび。さうさうとこれれば只渺茫として白雲
四方より壁土と奔木一復ちあふむ且く四顧すれば
さうと吹来る風は雨とつれて遠まらなくなりて何の文
ちも見えず。八雲の常は山谷に住せりれば。されは此
の雨毒なるひとさうして教るむ。されどりか食せしむお
不しぬば睥睨急るる。さうと思ひくとも食を求るよ
すぐもぬく。其中に雲をれ雨も止むと待どもく
雨毒やむ次牙は身は寒いのやうして中く居るや
かまぬば。あう探り回り高きの方堤とおぼし
歩あがり午足も。ともは身はよせ凍むめりみなり

くくとも雲をれる景色もるく。八雲つらくおもへら
く朝の雨夕の雨とい高き山の平生日雲の果ぬに備は
高山たもん。斯くもりの長い昏目の雨うさたりて最
も々夜中なるべ。茲はがりの辛抱せり其中に。
夜も明なるとさうろと定め気と軽げざるに況さ
かき。罰責なり。斯くして八雲は後ほどは最長に
も良更もあり。に又車軸を流し降来む心よ
よろこび朝の雨の降れば懸て夜あくる事よ
待むむれば。程なくして雨も止ぬ。八雲おもらく世よ
ふ卯の一越雨とかくよと首を擧あたりと看

八雲の物語の巻三

二七

ハ。日輪の升り方と着るの大きさを十畳ばかり
とも。みへく海窟より出現するやを看認おもへらく
是山こそ軍まゝ富嶽まであらんと次第は光明なり。
天晴なり。秋のそと高く雲の口は音々と看下
る水も瑠離ともくも高上八雲ひびくる手膝を
志めて除く下くなら一箇の池ありて其溜を黒くして。
湯の沸の湧あぐるごとく。又侍子盤石のありゆ
且く其くへありて池の沸を見しは遙きもの音
の聞ゆるゆへ八雲盤石は耳をあてて心をとらづめ
さくみ。數多の罪人呵責せらるるの聲すじりき。

偕におもふは是山の富士よていなり。越中の建山なる
べ。世より地獄とふれとよぶをよと。八雲大焚く
孤言より高山のあつく硫黄のある形れば其気
むし升る熱火水となり。斯水油く阿昆地獄とも言
し。即この巖石は耳を當れば呵責の聲
きこへも皆硫黄の勢あり。これを賣僧の人を欺
むるに達山の地獄をくつむ術せし夏世の痴人
もあつと頼然と山をさぐり遂に林床に著ぬま
よりハ。奥州金岳山よかへんと其道すくも又術を
働きとよふ己が隠窟の秘め執るは相れ破舎を

奥州金岳山よかへんと其道すくも又術を働きとよふ己が隠窟の秘め執るは相れ破舎を



飯り手下の者と集りて。昔も多きを執鳥と捉まれ
 越州の建山は行へ。今幸よし。家もかたなり。おもふ子
 執鳥と一刀突とめ。猛獸禽の巢穴も死とさせけり
 おもいらく彼執鳥の是より山の山も死なん看べしとて
 手分しを探せし。早然とて八雲がつ子違ふ。金
 岳山の峯に樹あり。柵の大木あり。其上に巢あ
 り。至りしれば。大なる執鳥。疵おほえ。死せり。臆て引おほし
 持かり八雲も看りれば。八雲其翅を剥き。胴は美大
 とみ。遂に喰せし。世にされと譚名し。執鳥剥波と呼
 縛本報仇安達原冊之三畢

